

阿川弘之



新潮社

坂の多い町

昭和三十五年九月二十六日 印刷
昭和三十五年九月三十日 發行

定價 二八〇圓

著 者 阿 川 弘 之

發行者 佐 藤 亮 一

發行所 株式會社 新 潮 社

東京都新宿區矢來町七一
電話東京(34)七二二(代)
振替 東京八〇八番

亂丁本はお取替えます。

印刷・二光印刷株式會社 製本 新宿・加藤製本

© Printed in Japan

目次

坂の多い町	五
詐欺の多い町	六七
童女	一九
ローマの雨	一九
スパニエル幻想	一九
紺紺鬼縁起	一八五
南蠻菓子	三五

裝
幀

難
波
淳
郎

坂
の
多
い
町

坂
の
多
い
町

一 略 圖

五キロほどの長さの岬が、小さな灣を抱くやうにして東側の海の中へ弧狀に突き出してゐる。町の大部分は、此の牛の背の形をした岬の、西の片なだれの上に位する。

遊覧船に乗つて外海へ出て眺めると、町には崖と坂道ばかり多くて、ケーブルカーでも敷設しなければ、とても人の往來が困難ではないかと見えるほど、崖の上に家が建つて、家の上に家が重なつて、牛の背の一番高い所まで續いてゐる。

然し、一度町の中へ入りこんでしまへば、そんな具合でもない。バスは急坂を登つて、坂と坂とに直角に暫く平らな道を走ると、又あへぎ／＼急坂にさしかかる。そして、甲蟲のやうな鈍重さと忍耐強さで、町の隅々、何處にでも通じて行く。

道は極端に細くて、而も曲りくねつてゐるが、バスとトラックが、或ひはトラックとタクシーが行き逢ふと、雙方は、行列の途中で觸角を突き合せた蟻のやうに様子を確かめ合つてから、ちり／＼と後しざりをし、それから再び微速で前進を開始し、店屋の軒をかすめて、巧妙に、

奇術師のやうに擦れちがつてしまふ。行き届いた補修などは、無論長年の間行はれた例しがないので、道は穴だらけで、晴れた日には砂の吹き溜りになるし、雨の日には泥海になる。下水溝の蓋は壊れて、至る所で黒い口を見せて、メタンガスのあぶくを湧かせてゐる。

海岸道の道路も、幅員をひろげたきり、二年以上も舗装されずに放置してあるが、町の人に訊ねると、

「未だ固まらないんでせう」と答へるのだ。市の建設課の役人は、鐵のローラーを買ふ豫算が引き出せないで、何處の道でも、バス會社や運送會社の車が、ゴムのタイヤを擦りへらしてバラスを踏み固めてくれる迄、舗装工事には手を出さないのだといふ話である。

バスの女車掌たちは、

「揺れますから、暫くの間御辛抱を願ひます」

「車交換の爲、暫くお待ちを願ひます」

「右へ曲ります。續いて右へ曲ります」

「毎度御乗車、お疲れ様でした」

と、テープレコーダーを仕掛けた人形のやうに、ひつきりなしにしゃべつてゐるが、自分たちの方が餘つ程疲れてゐて、いつも揃ひの佛頂面をしてゐる。

何處にも火災を遮るに足るだけの空間など無いので、風の強い日に海岸道から火が出たら、バスもトラックも動きが取れなくなつて、山の上まで一と舐めになるのは譯はあるまい、どう

する氣だらう、等と思ふのは、他所者の心配であるやうで、市民は格別足の不平も道の不平も唱へないし、火事の心配も別段取り立てて口にする様子はない。市廳に無益な意見具申をしたりするよりは、自分々々で火災保険にでも入つて置く方が、早道で確かだと承知してゐるものやうである。

尤も、町に樹木は中々多い。甘い誘ふやうな蜜柑の花の匂ひが消えると、しばらくしてあちこちの立派な泰山木が、白い大きな饅頭のやうな花を開いて、強い南國的な香りを、海風にのせて、坂から坂へ運ぶのである。丈の高いユーカリの樹や、廣く枝を張つた楠の大木も澤山ある。

天氣がよければ、岬の斜め背後から昇つた太陽は、一日中町の樹々と家々とを照らして、海風と協同で、洗濯物を何度も眞つ白に乾かせてから、外海へ沈んで行く。

人口密度は大變高い。

榮町銀座に軒を並べたバチンコ屋は、朝早くからでも、貧しい怠け者たちを誘惑するあの音をのべつに立ててゐるし、一寸見には中々活氣に充ちた町のやうだが、これと云つた産物はなく、海邊の町であり乍ら、海産物の水揚げ高は意外に少くて、町全體が貧乏でしみつたれてゐて、やや排他的である。

町の有力者たちは、「觀光々々」と口癖のやうに云つてゐるが、町に溫泉が湧く譯ではなし、實際は呼び物にするやうな觀光の種は、一つも無いのだ。外海に落ちる夕陽は美しいが、それ

を名物に仕立てるだけの智恵者がゐなければ、此の町までわざわざ入り日の景を見に来て呉れる物好きは、さうある筈はあるまい。

昨年の夏、市の汚物處理が不完全で、虹ヶ濱の海水浴場の海水中の大腸菌の事が、新聞の地方版に書き立てられ——これも一つ奥の話を聞いてみると、保健所長と市の助役との感情的對立が大きな原因であつたといふ説が出て来るが、とにかくそれ以來、海水浴に來る客の數も、がた落ちになつてしまつた。

町で一番立派な建物は、昨年の春、工費一億二千萬圓で竣工した、鐵筋コンクリート三階建の、ガラスを澤山使つたモダンな市廳舎である。市民は怒つてゐるかといふと、大ざつぱに云つて、皆が町の名所にして自慢にしてゐる。

此の町の學校は、小學校から高等學校に至るまで皆粗末だが、市民病院はそれより更に粗末だ。全院木造の古建築で、醫員が革のスリッパをひきずつて歩くと、廊下は驚張りのやうな音を立てる。一體に市民たちの醫藥の思想は發達してゐるとは云ひ難い。如來教のやうな新興宗教が、此の町で、多くの信者を獲得しても、それは理由があるといふべきであらう。

灣の南端で、岬の附け根になる所の平地に、私鐵の終點驛がある。三輛乃至四輛編成の電車が、早朝から夜かなり遅くまで發着する。此の町から外へ勤めに出る人々も、近郊から此の町へ勤めに來る人々も、大部分は此の私鐵を利用してゐる。その他、一日に一本、「ゆけむり」號といふ特急電車が、此所から四十キロばかり東の溫泉場に通ふバスに連絡して發着する。それ

から、毎年海水浴のシーズンには、「そよかせ」號「白波」號「なぎさ」號といふ三本の臨時特急が、此の町の西北六十五キロにある大都會から、子供たちや若い男女を乗せて、此の町へ送り込んで来る事になつてゐる。

したがつて、此の私鐵の終點驛のあたりは、町の一つの中心で、中々賑やかだ。

狭い驛前廣場は、バスの發着場、タクシーの駐車を圍んで、土産物店、パチンコ屋、食堂、コーヒー・バーラー、如來敎團信者休憩所などの建物が櫛比して、ラウドスピーカーが、甘つたるい女の聲で、

「……を是非お試し下さい」と、電車から降りて来る客、バスを待つ客に、のべつ呼び掛けてゐる。

此の驛前廣場から、北へ百五十メートルあまり行くと、道は入江のやうな掘割りに行きあたり、左手は直ぐ、丸菱造船所の正門だ。

丸菱造船所は、戰爭中は海軍の指定工場で、魚雷艇を造つてゐたが、當今は景氣がよくない。もと／＼丸山善兵衛といふ男の一族會社で、船大工と鍛冶屋の大きくなつたやうなものだから、經營者の頭が時代より一とテンポ遅れてゐて、役員が、

「やつと神武様がうちの方を向いてくれた」

と云つて、設備擴充の爲、半額有償増資を決定した途端に、公定歩合の引上げといふ事があつて、世の中の景氣の方が急速に後退してしまひ、株價が額面を割つて、とても順調には拂ひ

込みが行はれさうもないので、頭痛鉢巻で困つてゐるといふ話だ。

それでも、丸菱造船は、此の町に在る唯一の大工場である。丸菱が景氣がよければ、それに關連した産業や、町の娛樂機關や、運送會社や、花街もみんな活氣ついて來るが、それがこんな状態だから、いい事はない譯である。

川の下流のやうでもあり、海の入込みのやうにも見える掘割りの、油を浮かべてトロリと靜まつた水の上には、造船所の作業船がいつも三隻ばかり、横に並べて繋がれて舳つてゐる。

其所で造船所の正門を左に見て橋を越すと、弧狀の岬の裾に沿ふ海岸道だ。海岸道は、北の虹ヶ濱海水浴場に通じてゐるが、それよりずっと手前に、新しい三階建の市役所があり、市役所の一つ先を右へ折れた急な坂道二丁ほどが、榮町銀座通りになつてゐる。

一方、もう一度驛前廣場まで引返してみると、今來た道とは別に、それから岬の根元の一番横幅の廣い丘の方へ、まつすぐ上つて行く坂道がある。終點驛を眞下に見下ろす所まで出た所にあるのが、鈴木齒科醫院だ。鈴木齒科は、此の町で一番上手い齒醫者だといふ事になつてゐるが、それは此の先生が、長年の經驗から町の人々の氣風によく通じてゐて、相手を見て治療の使ひ分けをするのが巧者だからであるらしい。

鈴木齒醫者は、これはいきなり切つたら少し危いな、藥を飲ませて暫く様子を見てゐた方がいいな、と思ふ時でも、患者の職業や性質や、經濟狀態次第で、さつさと切開して、高價藥などは使はない事にしてゐる。頭の中で、どの位掛るか、どれだけ痛い事をされるかといふ二つ

の事を眞剣に考へてゐる患者は、電光石火、安上がりには痛みが止つてしまふと、必ず、「あすこは上手い」といふ評判を立てて歩いて呉れるものださうだ。其の方法が失敗で、あとに不都合が起つたら、それは又其の時の話で、ベニシリンなどで萬全の措置を取つて高く掛るといふのは、一般にあまり歓迎されないものである。

鈴木齒醫者は、保険證など見なくとも、身體の匂ひで町の人の職業を判別するさうだ。魚くさい魚屋や、味噌醬油の匂ひの染みついてゐる酒屋は、着更へをして來ても無論分るが、八百屋、パチンコ屋、自動車關係の仕事、肉屋、寫眞屋、靴屋、小間物屋、印刷所の人間、——それからこれは匂ひではないが、同じやうな背廣服の男でも、公務員か會社員かといふ事は、態度ですぐ見分けをつけるといふ話だ。

鈴木齒科醫院の前から、其の道を更に上つて行くと、此の町でも最も見晴らしのいい一角に、如來教團支部禮拜所、極樂殿の建物がある。

如來教は、いはゆる新興宗教によくあるやうに、教義も儀式のやり方も、佛教のそれと神道のそれとを好い加減につき混ぜたやうな鹽梅のもので、此の町の支部禮拜所といふのは、信者たちが祖師様と呼んでゐる、教祖出羽大吉郎の夏の別莊と思へば、間違ひはないやうだ。夏、教祖が此所へ逗留してゐる間は、三伏のお籠りと云つて、一般の信者たちは、玄關と其の次の間より奥へは、入れない事になつてゐる。

禮拜所は、年代は大分経つてゐるが、金の掛つたしつかりした別莊用の建築で、もとは或る

纖維成金の持ち物であつた。敗戦の翌年、出羽大吉郎が、大勢の信者を率ゐて此の町へ乗り込み、

「此所こそ、地上に極樂を打ち建てる爲に神が定めて置かれた場所である」と云つて、勝手に此の空き別荘を占居し、太鼓を叩いて祈りを上げ、一方事後承諾を求める形で、持ち主と賣買の交渉に入つた。それで當然法律問題になつて、教祖が一時拘引され、長い間もめたが、信者たちはこれを、昭和二十一年の大法難と云つてゐる。結局其の次の年の暮かに妥協が成立し、此の別荘は正式に出羽大吉郎の資産として登記され、極樂殿と名前がついた。

教團で出してゐる定價二十圓の冊子には、

「私はもともと此の町が氣に入つてゐた。そして此の、現在極樂殿になつてゐる建物を一ト目見た時、これこそ自分の求めてゐた所だと直覺した。其の直覺の鋭さ、強さは、神が出羽大吉郎をして、此所に根城を置いて、戦後の貧と病とに行き惱んで居る萬民の爲に、新しく救済の事業を興せよと呼びかけてをられるのであるといふ事を、明瞭に悟らせたのである。此所の土地は七百餘坪、家屋は約百二十坪、自然石を敷きつめた小徑を上ると、玄關は巽の方角にあり、傍らには魔除けの奇巖が屹立してゐる。玄關を入れば、廣々とした廊下が、御神前に當る廣間に通じてゐる。家全體は頑丈な大岩盤の上に立つてゐて、祝詞にある『下津磐根に宮柱太しき建て』といふのは、これである事は疑ひがない。立派な一枚ガラスの戸を練れば、そよ風は常に訪れ來たつて、入江から虹ヶ濱の一帯、更に青々とした外海まで、一望の内に望ま